
F@K E × F I L E

架院紅羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F@K E×F I L E

【Nコード】

N 1 9 5 1 G

【作者名】

架院紅羽

【あらすじ】

西ドイツの片田舎に一人の司教が降り立った。それは最近ヨーロッパの各地で頻発する連続殺人事件に端を発する。被害者は全身の血液を抜かれ、干からびた状態で発見された。人々は次第にそれを暁の吸血鬼の仕業だと噂し始める。暁の吸血鬼。それはかつての司教の義兄アレクセイだった。幸せな結婚式の前夜に妹である司教の婚約者を惨殺。そして自らを暁の吸血鬼と称して去って行った。司教はその痕跡を求め、最初の被害者が出たという西ドイツのある村を訪れる。

プロローグ（前書き）

あらすじでは残虐描写やグロテスクな表現が多そうですが比較的ライトです。そしてラブ要素もほんの少し加味していますので、ホラーや殺人事件モノが苦手な方でも大丈夫かと思えます。

ブローグ

「ふう、やっと着きましたか。しかし随分とまあ寂れたといえますか、鄙びた町ですねえ」

西ドイツの片田舎、マンハイムより降り立った一人の司教は、のんびりとした面持ちで深呼吸した。

広々とした蒼穹はどこまでも澄み切っていて限りがない。

司教が目指す町はここからかなり遠い。駅から周りをぐるりと見回してもこのホーム以外何もない。ただ広大な空と森が鬱蒼と茂っていた。

「やれやれ。一体村まで出るにはどこまで歩けばいいのやら。…確か迎えが来ると聞いていたんですがねえ」

そう一人で呟いてみるが、この寂れたホームのどこにも迎えの人間らしい者の姿は見られない。

やがて司教一人を降ろした列車は大きな音を立てて発車した。後にはもうもうとした黒煙だけがその名残のように漂っている。

取りあえずいつまでも何もないこの場所に留まってはられない。

司教は重い大きなトランクを手に鬱蒼とした森の獣道に行くことにした。

「あーっ、お待ち下さい！その方」

すると歩き始めた司教の背後から声が掛かった。声の感じから変声期前の少年か少女かと思われる。

その声に司教は立ち止まる。

彼を追う靴音はどんどんと近付き、土煙すら立ち上る勢いだ。

やがてその靴音が司教の前で止まる。弾む息遣いがすぐ背後から聞こえた。

司教は実々にこやかな笑みを浮かべて振り返った。

「おや？貴方は」

「ゼーはーゼーはー。は…初めまして司教さま。わた…私っ、ゼー、はーっ」

そこには白い燕尾服で正装した少年…いや、少女が立っていた。しつかりと結ばれたリボンタイが今の全力疾走でやや乱れている。また、なぜ少女だと分かったかというところ、その白いスーツを押し上げている膨らみは少年にはないものだったからだ。単に女装好きの少年という事もあり得るのだが。司教にはすぐに少女だとわかった。少女は美しい顔立ちをしていた。特に大降りの瞳が美しい。

「落ち着いて下さい。さあ、はい。深呼吸」

司教は優しく少女に深呼吸を促す。

少女は素直にそれに従う。

「ゼー、はー。はい。ありがとうございます。司教さま。私はアンリ。村長さまにご案内役を仰せつかって参りました。遅くなって申し訳ありません」

「ああ。貴女でしたか。良かった可愛らしい方で。私はヴァチカンより派遣されましたバイロンです。事件のあらましは大方伺ってます」

こうして向かい合うとバイロンはアンリより頭二つ分程背が高い。アンリは彼を見上げるようにして話を聞いている。

「そうなんですか。それは良かったです。あの…村までは結構かかります。早速で申し訳ないですがそろそろ参りましょう」

アンリの話し方を聞いていると、どうも敬語が苦手らしい。本来の口調はもっと砕けたものなのかもしれない。

「そうですね。では行きましょうか。案内宜しくお願いします」

「あ、司教さま。荷物お持ちしますよ」

そう言ってアンリはバイロンの重そうなトランクに手をかけた。

「いえ、女性には重いですから結構ですよ」

トランクの中の殆どは書物だ。そのどれもが嵩張るものばかりなので、かなり重い。バイロンが拒否するのも当然だ。だがアンリは微笑みを絶やす事なく楽々とそれを持ち上げた。

「あは…ははは。アンリさんは力持ちなんですね。私、ここまで運ぶのでも虫の息でしたのに…ははは…はあ」

「そうですか？でもこれ結構軽いですよ。ほら、片手で十分」

バイロンを気遣ったの発言だったらしいが、逆効果だったようだ。

「あははは…ぐすっ」

……色々な意味で自信を失いつつある司教であった。

アンリの案内でくねくねとたくった獣道に行く。

やがて獣道は道すらなくなり、暗い森が広がった。森は鬱蒼としており、昼だというのに夜のように暗い。

「あれがシュバルツバルト…黒き森です」

「ほう…黒き森ですか」

バイロンは含みのある笑みを浮かべ、白い手袋に包まれた手を顎にかける。

前方を歩くアンリの様子に別段変化は見られない。だがバイロンが気になったのは、森に入ってから急に口数が少なくなった事だった。そんな疑念を胸に抱きつつも二人はしばらく無言のまま歩いた。

最初に沈黙を破ったのはバイロンだった。

彼は俯いたまま口を開く。

「村へはこの方向ではないのでは？」

「よくご存じですね。司教さま……」

アンリの小さな背中が小刻みに揺れている。まるで何かを堪えているかのように。

やがて森は二人をすっかり包み込み、真っ暗になった。あれほど蒸し暑いと感じた大気が今では寒くすら感じる。

踏みしめる地面はうっすらと濡れていて、じめじめしていた。

「司教さま。ここへは本当はどんな目的でいらしたんですか？」

アンリは低く暗い声で問いかける。

「村長さんからは何も伺ってませんか？私はここ数ヶ月頻発している連続殺人事件について調書を取りにヴァチカンより参りました。そして貴女の村で最初の犠牲者が出た事はご存じでしょう？」

バイロンの言っている事は事実だった。最近ここ西ドイツ近郊で血液を大量に抜かれた死体が連続であがった。それは徐々に拡大し、ついにはイタリアはフィレンツェでも犠牲者が出た。それに伴っていいよ教皇庁が動き出したという噂は広まりつつある。そして事の発端である最初の被害者が出た村は今二人が向かっている村、トル村だった。

だがアンリの質問の意図はそこではない。

この司教は別の目的があつてここにやって来たに違いない。

穏やかに見える瞳の奥は血の色が混在していた。自分と同じだ。

「この森には守護者ガーディアンがいるという話を聞きました」

それは訥々な言葉だった。一瞬アンリの瞳に揺れが生じる。首筋に冷たい汗が伝った。

「それがどうかしましたか？」

「いえ。もしそれが本当だとしたら逢つてみたいとは思いませんか？」

もうアンリは怖くて後ろを振り返る事は出来なかった。

間違いない。彼の目的は自分だ。

「司教さま。貴方は運が悪い。どうせならもっと楽な方法で死ぬ事が出来たものを…」

その瞬間アンリの身体を取り巻く空気が変わった。

彼女の華奢な輪郭はぼやけ、背には猛禽類のような翼が現れる。

だが、バイロンは笑っていた。それは嘲笑などではない。歓喜の笑みだ。

「違いますね。アンリ。私は幸運なんですよ」

バイロンは背に手を回した。そしてゆっくりとその手を前に持つてくる。

するとその手には二振りの細剣が握られていた。それを顔の前でクロスさせる。

その頃にはアンリは恐ろしい異形に姿を変えていた。もうそこには先程の華奢で可憐な少女の面影はどこにもない。

その姿は地獄の番犬を思わせる残虐な魔物だ。大きく裂けた口からは酸の唾液が溢れ、大地を焼いた。

「ほう。これは想像以上に美しい……………」

バイロンはそれを見て、恐れおののくどころか、うつとりとした目をしていた。

それを見たアンリの顔つきが険しいものになる。

「村には近付けさせないっ！ 教皇の犬めっ」

アンリが人間離れた高い跳躍でバイロンに襲いかかった。

「ふふふ。お行儀の悪いお嬢さん…いえ、守護者殿だ」

フワリとバイロンが長身を翻し、鮮やかに反転した。それと同時に激しい一撃を見舞う。

キン！

アンリの長い爪が僅か切断され、周りの倒木や地面に突き刺さった。しかしアンリは少しも怯まない。

軽やかなバックステップと共に体勢を整え、すぐに身体を反転。そしてバイロンの頭部目がけて空気の圧力を放った。

密度の高い圧は竜巻のように真っ直ぐにバイロンに向かうが、彼はそれを剣で軽く弾いた。

「ま…まさか。あれを弾くなんて。お前は一体何者……」

「バイロン・R・ダリスですよ。アンリ。貴女を救う者の名です。覚えておきなさい」

「なっ……」

アンリは言葉を失った。そんな彼女にバイロンは先程とは打って変わって冷たい表情を向け、アンリへ向けていた細剣を下げた。

「貴女は私と共に来るべきだ」

「な…何を言っているっ！私は村長と村の人たちを……」

だがバイロンは無情にも首を横に振る。

「貴女は利用されているに過ぎない。利用するだけ利用した後は切り捨てられる存在だ」

「違う！違う！違うっ！お前に私の何が分かるっ。何を知っているっ」

アンリは自らの両耳を塞いで首を振る。もう何も聞きたくないというように。だが耳を塞いだつもりでも、司教の声だけははっきりと聞こえた。

「私は貴女を知っている。貴女の運命も。だから手を差し伸べたいのです。どうしても私が信じられませんか？アンリ」

アンリはしゃがみ込んで赤子のように小さく丸まったまま何も答えない。

「いいでしょう。ならば貴女に時間を与えましょう」

「えっ、時間…？」

その言葉にどういう意味かとアンリは顔を上げる。

「ええ。そうです」

バイロンはそううなずく。もうその手に剣は消えていた。

「村に参りましょう」

そう言った司教の背中からは先程まで感じていた異常な殺気は感じられない。もとの穏やかなものに変わっていた。

「アンリ、早く転化を解きなさい。その姿で村に入る気ですか？」

「あ…ああ」

まだ呆然とするアンリだったが、バイロンの呼びかけにやっと我に返った。

「お前、怖くないのか？」

「何がですか？」

森の外へ向けて、歩く速度を緩めずにアンリはそう問った。バイロンはこちらを振り返る事なく端的に切り返してきた。

「だから…私の姿…怖いだろう？」

するとバイロンは急に立ち止まった。びっくりとアンリも立ち止まる。バイロンはゆつくりと振り返った。フレームの無い眼鏡の奥の瞳に優しい色が滲んでいる。

「いいえ。怖いわけありません。貴女はとても美しい。私が今まで出会った生き物の中で一番美しい存在だと思います」

「！」

どうしてかアンリの胸が熱くなった。

熱くて堪えきれない高まりが涙となって零れ落ちそうになる。

今まで誰かにこんな言葉をかけてもらった事はなかった。だけど本当はずっと欲しかった言葉だ。

自分が怖くないと言っていていれる存在。

どうしてさつき合ったばかりの得体の知れない男がこんな言葉をくれたのだろう。

アンリは必死でその高まりを堪えた。

平和な村、トール

「ここがトール村です。私は村長さまに司教さまの到着を知らせて参りますので失礼します」

アンリはあれから無言だった。

バイロンも特に軽口を叩く事もなかったので、気付けばいつの間にか村の入り口に入っていた。

村に着いた途端アンリは荷物をバイロンへ返すと、逃げるように村の中へ駆けて行った。

口調すらも先程話していた砕けた感じのものから仰々しいものへと変わっている。

残されたバイロンはそんなアンリを笑顔で見送った後、不意に真顔に戻り村の周囲を見渡した。

「ほお…、製鉄で成している村なんですね」

ここ一帯は鉄鉱石と木材が豊富に採れる為、あちこちに製鉄の工場が建っている。

工場は村の殆どの者が働いており、活気に満ちていた。

とてもこの村で凄惨な殺人事件があったなんて思えない程のどこかで平和だった。

村の規模は小さく、ちょうど村の入り口の辺りでその全景を見渡せる。

今は昼時とあって、赤茶けた煉瓦造りの家々からパンを焼く良い匂いが立ち上っていた。

バイロンはそれらを珍しげに見渡しながら歩く。

すると家々の影から村の子供たちが、こちらを伺うように見ていた。バイロンは聖職衣のポケットから焼き菓子を取り出すと、子供たちを手招きで呼び寄せる。

子供たちは最初は警戒したようにこちらをチラチラと伺っていたが、バイロンの手の中にある焼き菓子に興味があるのか、次第にその距離を詰めていった。

「はい。どうぞ。頂き物ですが美味しいですよ」

バイロンの声を合図に、子供たちがわつと一斉に走り寄って来た。子供たちは歓喜の声をあげながら、菓子を頬張る。

「ありがとう。司教さま。ねえ、司教さまはアンリちゃんをやっつけに来たの？」

口いっぱいに焼き菓子を頬張りながら、赤毛の少年はバイロンに無邪気な笑みを向けてくる。

「やっつけに…ですか？いいえ。滅相もない。私はアンリとお友達になりたくて来たんですよ」

バイロンは少年の目線に合わせて膝を折ると、その柔らかな赤毛を撫でた。

「なあんだ。そうだったのか。良かったあ。僕はてっきりアンリちゃんをやっつけに来た悪者かと思ったよ」

少年は心から安堵の表情を浮かべると、バイロンに礼を言って、広場の方へ他の子供たちと一緒に走り去って行った。

（ふむ…アンリは村の守護者として扱われている事は確かなんですね…）

バイロンは何かを考え込むように顎に手を当て、今去った少年の方を見ていた。

子供達と別れ小道を歩いていると、村でも一番大きな建物に行き着いた。

庭にある大きな噴水からは清流が絶え間なく流れ込み、虹のアーチを作っている。

コンコン

扉に付いた小鳥の呼び鈴は使わずに、扉を直接叩く。

すぐに「はい」と女性の明るい声が返ってきた。

「まあ、これはこれは司教さま。ようこそ我が村へおいでなさいました。ささ、お疲れでしょう。中へどうぞ」

勢いよく扉が開き、香ばしいパンの匂いと共に小太りの老女が顔を見せた。

村長の妻だろう。

バイロンは礼を言うとは荷物を婦人預け、広間へ通された。

「おお、司教さま。ようこそ我が村へ。済みませんわざわざこちらまで出向いて頂いて…。本来ならばこのアンリがご案内したものを…」

「いえ、お気になさらずに。私もここへ来る道すがら、村を見物させて頂きましたから」

「はあ…。本当に済みません。あの…。何もないところですが、ゆっくりして行って下さい」

美しい花々をあしらった壁紙が目を惹く広間には、婦人より多少小太りの男が真つ先にバイロンに握手を求めてきた。この村の村長だ。バイロンは笑顔で握手に応じる。

続いてバイロンは壁側のソファに視線を移動させた。

そこには無愛想な顔をしたアンリが、こちらを何故か怒ったような目で見ていた。

多分アンリが迎えに行く前に村の入り口から移動した事を怒っているのだろう。

「それで司教さま。ご滞在日数は？」

その前に婦人が焼き菓子とローズティーをテーブルの上に並べた。

「ありがとうございます。ここへは調書を取りに来ただけですので、少々村の皆さんに事件のお話を聞いたらずくに帰ります」

その言葉に村長は、やけにほっとしたような安堵の表情を浮かべた。

「そうですか。ではそれまで司教さまにはこの離れの屋敷を使つて頂くとして…。下女にこのアンリを付けましよう」

ガタン

村長の言葉にアンリはローズティーを吹き出した。

「あつちい！」

「大丈夫ですか？アンリ」

「大丈夫です。ちょっと紅茶が掛かっただけですって…し…司教さま？」

アンリの言葉は裏返った。突然何を思ったのかバイロンがアンリの火傷した指先を口に含んできたのだ。

突然の事にアンリの頭は混乱する。

「何をするっ！」

思わず村長の前にも関わらず、アンリは敬語を忘れて手を引っ込める。

「あれ。まだ痛みますか？」

形の良い唇が離れた途端、アンリの火傷は痕も残さず消えていた。

「あれ…痛くないです」

これには村長もびっくりした顔で言葉を失っていた。

「どうしてこんな…」

「さあ…。愛の力ではないですか？」

バイロンはしれつとした顔で香り高い紅茶を啜った。

「これは素晴らしい神の奇跡だ。それを目の当たりに出来るなんて！」

村長は興奮気味に声を荒げた。

だが、アンリはまだ訝しげにその指先を見つめていた。

聖気を纏う者

「ここが離れの屋敷です。では何もなければ私はこれで…」

村長に言われてアンリが案内した離れは、村長の屋敷からやや離れた東側の建物だった。

白い外壁の屋敷はきちんと手入れがされており、清潔感があつた。中に入ると、内部もしっかりと掃除が行き届いており、すぐにここで生活が始められる程だった。

廊下にある大きな明かり取りの窓からは、暖かな陽光が差し込んでいる。

「いやあ、中々立派ですねえ…」

部屋のあちこちを見回った後、寝室に移動したバイロンはすぐにベッドに腰を下ろした。

それを見届けた後、アンリは部屋を速やかに出て行くこととする。

「おや。アンリ、どちらへ？」

アンリは不思議そうな顔でこちらを見た。

「えっ？もう用がないので帰ります。ではまた明日…」

「お待ちなさい。誰が帰っていいと言いましたか？」

ベッドに上半身を起こし、バイロンはこちらへアンリを手招きする。
「何ですか…」

「アンリ、別に二人だけの時は敬語にしくてもいいですよ。それより、私が言いたいのは下女としての仕事はそれだけでいいのですか？という事です」

「は？でも私は料理も掃除も……」

そこまで言ってアンリは口ごもる。

しかしバイロンは首を振って微笑みを浮かべた。

「それは必要ありません。食事はあの村長の奥方が用意して下さる

でしょうし、掃除も同様でしょう。私はそんな事を貴女に求めたりはしません」

「じゃあ、何ですか…？」

直感的に厭な予感がしたので、思わずアンリの腰が引けた。するとバイロンは悪戯を思いついた少年のような表情を浮かべる。

「添い寝して下さい」

ゴン

アンリの鉄拳が枕に沈んだ。

本来はバイロンの頭に打ち込まれるものだったが、彼はそれを素早く交わしたのだ。

枕はその衝撃で破れ、ふわふわと中に入っていた羽が舞った。

「別にいいじゃないですか。添い寝くらい。私はそれでも司教ですよ？身も心も神に捧げた身。滅多な真似はしません」

「信用出来るか！この似非司教が」

がるるつと牙を出してアンリが威嚇する。

「全く、頑なですね。お腹でも空きましたか？」

ギクッ

それは凶星だった。

アンリは人間ではない。

黒き森の番人、または守護者などと呼ばれてはいるが、一部の者たちからは黒き森の悪魔と呼ばれている。

彼女はいくつもの異形の姿に転化出来る。彼女の出自については本人ですら定かではない。二十年程前より黒き森に現れ、村に害意のある獣を退治したのだ。それ以来ずっとこの村の者たちを守護して

いる。

彼女は村には住んでいない。

アンリの住処は黒き森だ。

異形に転化しなければ村でも普通に生活出来ただろう。

だが問題はもつと別にある。

それは食事だ。

アンリの糧は人間の摂取する食物からは摂れない。

深い森に多く含まれる「聖気」と呼ばれるものを摂取するのだ。

「聖気」は人の多い場所等には含まれない。

だからアンリは森で生活するしかない。それはもう慣れた事なので今更淋しいとは思わない。そう…。今更。

それより今はそろそろアンリの食事時。アンリは空腹を感じていた。

「お前、どこまで知っている。とにかく分かっているなら止めないで欲しい」

部屋を出て行こうとするアンリの腕をバイロンが捕らえた。

アンリは驚いてそれを振り払おうとするが、逆に引き戻されてしまふ。

ガクンと身体が傾いでアンリの束ねた長い髪が揺れる。

「私のは「森」なんかよりもずっと濃いですよ？」

言うが早いか、バイロンはアンリの小さな唇を自分の柔らかな唇で塞いだ。

「んっ…ふぁ……」

アンリは目を見開き、バイロンを突き飛ばそうと拳を固めたが、次の瞬間異変を感じた。

（これは聖気………？）

冷んやりとした彼の唇から甘美な聖気が流れ込んできた。
それはアンリが今まで味わった事のない純粹な聖気だった。
気付けばアンリの方が夢中で唇を合わせていた。

「意外に大胆ですね。少し驚きましたよ」

唇を離れたバイロンは艶やかな目でアンリを見た。アメジストのような紫の瞳と視線がぶつかる。アンリは急に恥ずかしくなって目を背けた。

「お前、どうして聖気なんて持つてる？」

「さあ。どうしてでしょう。それよりどうです。お腹は満たされましたか？」

「……………」

返す言葉もない。夢中で彼の唇を食ったのは自分だ。

彼の言った通り、彼の聖気は今まで味わった事のない極上のものだった。

アンリは俯いてただ羞恥に耐えた。

「着替え、手伝ってください」

バイロンはそんなアンリに見てかすかに笑みを浮かべた。

そしてベッドから立ち上がり、黒十字の縫い取りの入った聖職衣を摘んだ。

仕方なくアンリも立ち上がり、その衣服に手を掛けた。

シュルリ…

長い衣が肩を滑り、床に落ちた。

華奢に見える外見とは違って逞しい肉体が露わになる。

無駄な肉は無く、その代わり肩や胸にはしっかりとした筋肉が付い

ていた。

しばらくアンリは見とれるように惚けていたが、彼の左肩に見慣れぬものを見つけた。

それは黒の縁取りに白い十字架の文様。
入れ墨なのだろうか？

「ああ、これですか？これは聖痕というんですよ」

「聖痕？」

聞き慣れない言葉だった。

アンリは聖職衣を手にしたまま首を傾げる。

バイロンは露わになった腕を白い手袋に包まれた手でそっと覆った。

「呪いみたいなですよ」

そう言ったとき彼は薄手のガウンを纏うと何も語らなくなった。

それは彼にとって踏み込んではいけない領域だったのかもしれない。
言いしれぬ何かを感じはしたが、今は満腹で久しぶりに満ち足りた気分だったのでアンリは深く考えない事にした。

こうして司教がやって来た一日目は終わった。

朝の風景

あれから一夜明け、村は今朝から晴天だった。

「おはようございます。アンリ」

耳元で囁くような甘いテノールが聞こえる。その声につつぶせで眠っていたアンリは眠い目を擦って辺りを見回す。

「おはようつて……、えっ！もう朝？つてか何で司教さまがここに？」

窓からはきつい陽光が直接差し込み、それが起き抜けの網膜を強烈に焼いた。

無理に目を開けると、隣にはすっかり着替えも済ませたバイロンがニコニコ顔でこちらを覗き込んでいた。

「何でつて貴女は私の下女ではないですか」

「……司教さま。私に何かしなかったでしょうね？」

むくりとベッドから起き上がると、アンリは着衣の乱れを丹念に確認した。首のリボンを外した以外は別段異変はないようだ。

それを見てバイロンは小さな息を漏らす。

「何かするのは貴女じゃないですか？」

そう言つて彼はアンリの方に顔を寄せる。ふわりと司教から立ち上る甘い匂い。極上の聖気が放つ芳香だ。

思わずアンリの喉がゴクリと鳴る。

しかしバイロンはそれだけで何もしてこない。

つまり食事をするなら今度はアンリの方から求めると言外に言っているのだ。

冗談ではない。

アンリはベッドから勢いよく飛び降りようとした。……が、やはり思うように身体に力が入らない。

「くそっ、森なら意識して摂らなくても空気のように摂取出来るのに……」

「ほら。食事するなら早くして下さい。ずっと貴女を待っていたのですよ」

「くそっ。背に腹は代えられないのか」

「いつまで待たせるつもりですか？」

ちゅっ

自分で誘っておきながらバイロンは結局自らアンリの唇を掠め取っていた。

そこから流れ込むのは相変わらず極上の聖気だった。

半分陶醉したような顔でアンリはそれを吸収した。

今まで力が入らなかった身体の隅々に力が漲る。

「うっ……」

「ごちそうさまでした」

「この色情司教めっ」

「おやおや、それはどういう意味ですか？もう一度最初からじっくりと教えて差し上げましょうかね」

「な……何をだよ」

じりじりとバイロンはアンリとの距離を詰めていく。

緊張で脂汗を浮かべる鼻の頭をバイロンは、ちよんと突いた。

「もう、知ってるくせに。アンリはおませさんですね」

「なっ……何がだっ！」

「あははは。そろそろ下に降りましょう。私は朝食を摂ります」

「馬鹿……」

バイロンに投げ損なった枕を抱きかかえ、アンリは牙を剥いて唸った。

本当にとんでもない聖職者である。

「ああ、司教さま。おはようございます。昨夜は良く眠れましたか？」

階下へ降りるとパンの焼ける香ばしい匂いと村長夫人のふんわりとした笑顔に出迎えられた。

「ええ。朝までぐっすりと。よく働いてくれる下女がおりましたから」

そう言つてバイロンは食卓に付いた。

それを聞いて婦人はアンリを少し疑わしい目で見たが、アンリはそれを無言でやり過ごした。

食卓には焼きたてのパンの他にもこの村で採れた野菜を使ったスープや、木苺のジャムなどが

並んでいて、それらがとても良い匂いを放っていた。

婦人はバイロンの前に置いたカップに温かいハーブティーを注ぐ。

たちまち花の芳しい香りが湯気と一緒に立ち上る。

その香りを味わうようにしてバイロンはカップに口を付ける。

「うん……。やはり美味しい」

「そうですか？これは主人もとても気に入っている茶葉なんですよ。司教さまに気に入って頂いて嬉しいです」

しばらくそんな他愛のない事を話していたが、不意に婦人の表情が堅くなる。

「あの…それで今日はどうされるのですか？司教さま」

婦人がバイロンの顔色を窺うようにしてかがみ込む。

だがバイロンは穏やかな表情でカップをソーサーに戻す。

「そんなに構えないで下さい。私は別に皆さんを尋問する気はありませんよ。ただ事件当時の皆さんの様子を少し尋ねるだけです」

「それが尋問ってやつだろ」

横でそれを聞いていたアンリが憮然とした顔でぼそりと漏らす。

「アンリさんは私を分かってないですね。貴女は私を悪の手先か何かのように誤解していませんか？」

「誤解じゃなくて事実だろ。違うのか？」

「アンリっ、お前司教さまに向かって何て口を叩くんだいっ！」

その時、二人のやりとりをただ聞かされていた婦人が我に返ったようにアンリを叱った。アンリの方も婦人の前だった事をすっかり忘れていた。

「あっ、奥様どうも失礼しましたっ」

「私はいから司教さまに謝りなっ」

「あははは。別にいいんですよ。気にしないで下さい。ねえ、アンリ」

バイロンはしれっとした態度でそれを収める。

「ちっ…聖気を纏った悪魔め」

「何か言いましたか？黒き森の守護者さん」

「……………」

嫌味を言っ たつもりが逆にやり返されてしまった。

アンリは悔しそうに歯ぎしりをした。

暁の吸血鬼

「司教さま。どこに行かれるのですか。あんまりうろつろされると私が……」

朝食を済ませ、屋敷の離れを出たバイロンはアンリを伴って外に出た。

途中、大きな水車が邪魔をしてバイロンの声もよく聞こえない。自然とアンリの声も大きくなっていく。

「最初の犠牲者が出た牧師館に行きます。確か教会の礼拝堂で礼拝に来ていた娘さんが倒れていたのが始まりだったと伺っています」

「確かにそうだけど……、まさか牧師さまを疑ってるんじゃない」

二人は歩きながら川沿いにある小さな教会を目指した。

その間も二人は野良仕事中の村人たちに奇異の目で見られていた。どうやら昨日ヴァチカンから彼が派遣されて来た事は、村中の知るところとなっているようだ。アンリは気が気ではなかった。

「牧師さま……ですか。早計ですね。私は何度も言っているじゃありませんか。ただお話を聞きたいと。……あ、どうやらここがそうですね」

教会は村長の屋敷からさほど離れていない。

大きな植え込みが無ければもっと早く着いただろう。

バイロンはどんどん突き進む。アンリは逆に重い足取りで付いて行った。

コンコン

「こんにちは。私、教皇庁より遣わされた者です。牧師殿に少々お話を伺いたく参りました」

その声に、ややして重い木製の扉がゆつくりと開いた。
そこから濃紺の衣を纏った妙齡のシスターが顔を覗かせる。

シスターはバイロンの姿というより、彼の纏う聖職衣の黒十字の紋を見て一瞬狼狽の表情を浮かべた。だがそれもほんの一瞬の事。次の瞬間には慈愛に満ちた微笑みを浮かべて二人を招き入れた。

「こゝこれは司教さま。お話は村長さまより伺っております。さあ、どうぞ中でお待ち下さい。ただいまアーサー牧師を呼んで参ります」
そう言うとシスターは長い衣の裾を摘んで、礼拝堂の奥に入ってしまった。

バイロンはそれを注意深く見ていた。

一方アンリはそれに気付く事もなく、礼拝堂の長いすに腰を下ろした。

「さて…。牧師は果たして本当の事を話して下さいますかね」

バイロンは礼拝堂の右手にあるパイプオルガンの鍵盤に触れてみた。鍵盤に落ちるステンドグラスの美麗な光は美しく、荘厳だった。

「本当の事も何も…。牧師さまは何も疑わしい事はしてないぞ」

どうもバイロンはこの牧師を疑っているような気がする、アンリはそう思っていた。

するとバイロンは急に劣るような視線をアンリに投げかけた。

「貴女は純真無垢ですね。何て清らかなんだ」

「馬鹿にしているのか？」

「まさか。本心ですよ」

「むー……」

何となく馬鹿にされたようで悔しい。アンリは憎々しげに司教の後

ろ姿を睨んだ。

そんな折り、奥の部屋から先程のシスターが出てきた。

「お待ちせして済みません。司教さま、アーサー牧師がお会いになるそうです。こちらへ」

「そうですか。それはご協力感謝します。ではアンリ、行きましようか」

すると急にシスターの顔色が曇る。

「あの…彼女も一緒にですか？」

シスターはアンリの同行までは考えてなかったようだ。

「ええ。勿論です。彼女は私の下女として村長さまが遣わして下さったのです。何か彼女がいては不都合でも？」

バイロンは一見柔和な印象を受けるが、一度眼鏡を下へずらすと、冬の湖に薄く張った氷のように冷たい瞳に変わる。

それは見えない圧力がかかったように全身に広がっていく。

事実シスターは一步後ろへ下がった。その顔は青ざめてすらいる。

「い…いいえ。どうぞお二人ともお入り下さい。牧師は中です」

バイロンとアンリは俯くシスターの横を通り抜けた。

すると細い通路の先に鉄の扉が目に入る。キリストの装飾が施された重厚な扉をバイロンはノックもせずの開いた。

ギギギ…

「初めまして牧師。私はバイロン・R・ダリスです。この村を脅かすある事件について二三、お話を聴かせていただいても宜しいでしょうか？」

扉の先は狭く黴臭かった。

実際はもつと広いのかもしれないが、なにぶん書物が多くてそれが部屋の半分以上を占領していた。その本棚と沢山の木箱の山の先に一人の青年が物憂げに座っていた。

彼が牧師なのだろうか。

ずいぶん若い男のようだ。

蠟細工のように白い肌に透けるように細い金髪。その髪は長く、腰の辺りで緩くまとめてある。

彼はバイロンたちに気付くと、読みかけの書物から目を離し、こちらを真つ直ぐに見てきた。

二人の視線が一瞬絡み合う。

アンリはバイロンのアメジストの瞳と牧師の真つ青な瞳が、一瞬敵意を持った獣のように光ったのを感じた。

しかし次の瞬間には牧師は柔らかで友好的な笑みを浮かべた。

「初めまして、バイロン卿。牧師のアーサーです。ようこそ。トルへ。歓迎しますよ」

甘い低音でアーサーはバイロンに白い手を差し伸べる。

バイロンはにこやかにそれを受けた。

「おや。アンリさんも一緒でしたか。では、菓子も用意しましょうね」

先程見せたあの視線など無かったように、アーサーは人好きのする笑顔を浮かべて部屋の隅にある小さな竈に火を入れた。

バイロンはただ黙ってその様子を見ていた。

それはよく話す彼にしては珍しい沈黙だった。

「牧師さま、こちらの司教さまはこの村で最初の犠牲となったハイ

ネの詳しい話をお聞きしたいそうです」

椅子を勧められた二人の前に、こんがり焼き上がったアプリコットパイが置かれる。それは牧師の手作りで、器用な彼は何でも卒なくこなす。牧師はそれらを作ってはよく村の子供たちに配っていた。アンリも牧師の焼く菓子は好きだった。

聖気を糧とする自分にとっては何の足しにもならないと分かっている。でも、味覚は普通にあるのだ。それを美味しいと感じる心は確かにあった。

それを見ていたバイロンは、アンリの牧師を見る視線にある一定の温度がある事に早くも気付いていた。

「そうなんですか。ただ僕は第一発見者といってもそれ程詳しい事情は知らないのです。犠牲者のハイネという少女もこの村の者ではない事ですし……」

力になれなくて申し訳ないといった辛い顔でアーサーは俯いた。そこに後ろめたい成分は少しも含まれてはいなかった。

「ほら、牧師さまに聞いたって何もないですよ。さあ、もう行きましょう」

アンリがやけに自信たっぷりで胸を張る。

だが、バイロンの方はそうではない。彼はますます興味を持ったように眼鏡の奥の瞳を輝かせた。

「死体発見時の状況はどうでしたか？詳しくとは言いません。おおまかな事で結構ですよ」

すると牧師は当時を思い出すように、細い顎を手で摘んでみせる。

「そうですね…。霧が…。そう。赤い霧が出ていました。そんな奇妙な夜は初めてだったのでよく覚えています。そこで不安になって村

の様子を見に行ったのです。村は幸い何も異変はありませんでした。そして最後に礼拝堂を見ていこうと思い、扉を開けたら……」

牧師はそこで口を閉ざした。辛そうに手を口元に寄せる。

まるでその当時の事を思い出したかのように、白皙の美貌には恐怖の翳りが見て取れた。

「そこにハイネという少女が倒れていたという事ですな？」

バイロンは牧師の言葉を引き継いだ。

牧師は黙ってうなずく。

「彼女は仰向けに倒れていました。その細い首筋には獣か何かの咬み痕がありました。ちょうど青く浮いた太い血管に……」

牧師は自分の首筋に手を当てた。

「それは血液を抜かれていたのですか？」

牧師は更にうなずく。

「ええ。それもかなりの量です。遺体の周りには血液は一滴も付着していなかった事から、やはり人間の血液を啜る魔物だと言われています」

「血液を啜る魔物……ヴァンパイアですか？」

アンリがボソリと呟いた。

バイロンはお茶を啜りながら、彼女の方をそっと見た。

「ええ。そうなんです。市警は驚いた事にその線で触れを出したようですね。これでは30年前の「暁のヴァンパイア」の再来ではないですか」

牧師は軽い冗談で言ったのだろう。軽く笑い声をあげた。

「暁のヴァンパイア？それって何ですか？」

「アンリさんは聞いた事ありませんか？今から30年程前にローマ

辺りで今と同じような手口で人々が襲われた事件を。まあ、私達が生まれるずっと前の話ですからご存じないのも無理はありません。それで犯人は結局見つからずに事件は迷宮入り。ちょうど被害者の殺害時刻が皆明け方でしたので付いた通り名が暁の吸血鬼^{ヴァンパイア}…というわけなんですよ」

「へえ…。初めて知りました」

「ここは平和な村だからね。アンリさんの耳に入らないもの無理ないよ」

牧師の声は穏やかだった。

「……まあ、大体の事情は掴めました。ありがとうございます。またいくつか質問が出来ましたらその時はよろしくお願いします」

「ええ。是非気軽にお訪ね下さい。アンリさんもいいですね？」

「えっ…は…はいっ。喜んで」

後はいくつか当たり障りのない事を質問してバイロンは席を立った。牧師はそれを笑顔で見送る。

アンリたちが礼を言って教会を出ると、建物の影からシスターが二人の去る姿を暗い瞳で見つめていた。

「……………」

教会を出てすぐにバイロンはアンリを見て口を開く。

「アンリさんはああいった線の細い中性的な男性がお好みなんですか？」

「はあ？何を突然っ。私はただ牧師さまを尊敬しているのであって…」

アンリは明らかに動揺していた。顔を真っ赤にして必死に否定している様子が滑稽な程に。

「ふふふ。恋する乙女は可愛いですね。でもライバルは手強そうですよ？」

そう言つてバイロンは後ろを振り返る。

そこには先程までいた教会がある。

「何言つてるんだか……」

アンリのつぶやきにバイロンは応えない。

もし尋ねたとしても答えを言ってくれる事はないだろう。

それが今では何となく分かつていた。

教会へと続く小道から二人が去つていくのを、やや離れた納屋から窺う人影があつた。一人は長身で髪の長い青年。もう一人は肉付きの良い老年の男。

二人は密談を交わすように対峙している。

「どうです？今日の動きとしてはまだ大した収穫を得た様子はありませんが……」

「そうだね……。でも油断は禁物だよ。過信するんじゃない。彼はあれでいて思慮深い」

「しかし本当に彼の訪問が我々の計画に大きな支障を与えるんですかね」

老年の男が半信半疑で呟く。

「油断してはなりません。彼は「悪魔」を狩りに教皇庁より遣わされた番犬です。貴方はあの娘を使ってこの村を守らねばなりません。その責務は重いですよ？わかりますね」

金糸の縁取りの施された袖から伸びる白い手が老年の男の肩に置かれる。

逆光でその顔は殆ど見えない。

だが、長い金色の髪の間から爛々と光る瞳は血のような紅だった。

「分かった。本当にあの娘を使えば村は助かるんですね？」

「ええ。神に誓って……」

老年の男の前で長身の青年が空に十字を切る。

「さあ、もうお行きなさい。貴方にはこれからやる事が沢山あるのだからね」

そう言われて老年の男は、長身の青年に深々と礼をして納屋を出て行った。

後に残された長身の青年は長い前髪を掻き上げ、うつとりと微笑んだ。

「バイロン……。また逢えたね。あれから少しは強くなったのかな？　フィリアを守るくらいには……」

暗闇の中、血に飢えた紅の瞳が光り、いつの間にか手にしていた黄金の髑髏に青年は愛しげに口付けた。

花妖精メル

「あれ…司教さま。帰るんじゃないかったんですか？こっちは村長さまの屋敷と反対ですよっ」

教会を後にしたバイロンは、勝手にどんどん人気のない村はずれに向かって歩きだす。

「知ってます。こちらは確か墓地でしたね」

「知ってるならなんでそんな場所に…」

するとバイロンは立ち止まり、眼鏡のブリッジを指で押し上げた。

「どうもこの村の方々は正直ではない。ならばこの地で眠る犠牲者に直接聞きます」

「んなっ…！正気ですか司教さま」

アンリは耳を疑った。

それが聖職者の言う事なのだろうか。

しかしバイロンはどうやら本気のようにうた。

いつの間にかもう辺りは夕闇が迫り、そろそろ何か出てもおかしくない雰囲気包まれている。

「怖いですか？黒き森の悪魔さん」

「な…何で…知ってたんだ。私の事」

こんな時にいきなり自分の通り名を言い当てられてアンリは思いきり動揺した。

彼は最初からアンリの事情を知っていたのだ。

それが今更分かって、どうも悔しい。

「そんな事より先客さんがいらしたようですよ」

話しながら歩いているうちに、いつの間にか二人は村はずれの墓地に足を踏み入れていた。

薄暗い墓地は湿った風が漂い、全体的に寒々としている。

バイロンの示す先には、十字の墓石の一部が歪な形に隆起した辺りだった。

「な…何だあれ。墓の下に何かいる…？」

「あれは^{ファントム}霊魂ですね」

「^{ファントム}霊魂だつて？」

土が隆起した部分は次第に大きくなり、ぼこぼこ奇妙な音を発し始めた。

それでもバイロンは落ち着いたもので、余裕で腕組みをしている。

「アンリは下がっていなさい。危険ですよ」

「下がっているって言われたって…。私はこの村の守護です。これを黙って見ている事は出来ません」

アンリはバイロンの前に立って、戦闘態勢を取るが、それは片手で止められる。

「駄目です。下がっていなさい。貴女はここで転化するわけにはいかないでしょう？」

その言葉にアンリの動きが止まった。

そう。ここは村の中なのだ。森ではない。

ここで転化した姿を村人に見られる事は避けたかった。

「私…私は……………」

言葉を失ったアンリをバイロンは手を引いて墓地の外に連れ出す。

そして自分は再び墓地の中に入っていった。

去り際、バイロンは立ち止まり口笛を吹く。

「メル。いますか？」

バイロンはまるで空中に語りかけるように何も無い空間に話しかけ

た。

するとすぐに可愛らしい女の子の声が返ってくる。

「はいでし！メルはいつもファーターのお側に」

次の瞬間にはバイロンの前に小さな女の子が立っていた。

身長は130センチくらい。年齢は7歳か8歳くらいといったところか。淡い透けるような薄桃色の髪と、紅色の大きな瞳が愛らしい少女だった。

まだ幼いながらも人目を惹く美しさを持っている。

しかしすぐにアンリは少女に異変を感じた。

「は…羽？羽が生えているっ」

少女の小さな背中には半透明のセロファンのような翼が生えていた。それを見てアンリはまたもや言葉を失う。

「おやおや。ご自分だって立派な翼をお持ちでしょうに」

「メル、花妖精なんでし。初めまして。お姉ちゃん。メルはバイロンファーターにお姉ちゃんをお守りするようお願いされました」

アンリは呆れた表情のバイロンと、瞳をキラキラさせて自己紹介を始めるメルとを交互に見た。

「ではメル。後は頼みましたよ」

「はいでし。しっかりとお姉ちゃんをお守りしますでし」

バイロンの言葉にメルは張り切って両手を振り回した。

「あ…あの……」

「あ、お姉ちゃん。メルはこれよりここに結界を張ります。危ないからここから出ないようにして下さい」

そう言うとメルはどこから取り出したのか、小枝を手にすると地面に複雑な文様を描き始めた。それをぐるりとアンリと自分が中心に

来るように囲む。

「はい。ばっちりです」

「ご苦労。メル」

それを見届けてバイロンは墓地に向かって行った。

「あつ！司教さまっ」

事態が掴めずに思わず叫ぶが、バイロンの姿は墓地の向こうへと消えていった。

精神剣

暗闇に刃の交わる音と蒼い閃光が散っている。

バイロンは鋭い目で墓の下から這い出てきた異形を睨み据え、いつの間にか手にしていた二本の細剣でその首と胴を一刀両断した。

飛沫く体液と耳障りな悲鳴が同時に上がった。

更に間隙を与えず、背後から襲いかかってくる異形にもう一太刀浴びせる。

ほんの数分でバイロンは全ての異形を始末した。

アンリはただただ圧倒され、結界の中から呆然とその様子を見ている事しか出来なかった。

メルの方は、好奇心旺盛に瞳を輝かせてその様子を見ている。

全てが終わり、バイロンは剣を軽く払った。

すると剣は一瞬で輝く光の粒と化し実体を失った。

「な…何だ。あの剣は」

「あれは精神剣でし。ファーターの心で形を作る特別な剣でし」

「心？」

殆ど呟きとしか取れないアンリの疑問をメルは聞き取ったようで、少し得意になったように教えてくれる。

「そうでし。あれは心が強い程強い武器になるんでしよ。この世にはファーターの持つアイン、そしてドライ、ツヴァイ、フィアの四つの精神剣が存在するんでし」

「ん…、するとバイロンの持つっている二本の剣は二つ対でアインと言うのか？」

先程の戦いでバイロンは二本の剣を使って戦っていた。

美しい文様が剣の束に施された光り輝く剣に見えた。しかしメルは

首を振る。

「あの銀の剣はちょっと特殊なんでし。精神剣のように心の強さで形を取るんですが、まだ謎の部分が多いんでし。名前は零式^{ゼロシキ}と言いまし」

「ゼロ……」

「他の四つの剣の雛型になったとも言われてるんでしよ」

「試作品って事か？」

メルはそれには曖昧に口を濁した。彼女にもよく分からないのだらう。

「うーん。零式はまだまだ謎が多い剣でしから、一概にはこうでしって言えないでし」

「そうか。でもありがとう」

どうもこうして話しているとメルの年齢を忘れてしまう。

だが、外見年齢が実年齢と比例しているかは、彼女の背中の羽を見る限り信用出来ない。

「おやおや」。私が頑張っている間にお二人仲良しこよし。いいな。いいな」

するとそこには淋しそうに指を咥えたバイロンが膝を抱えて二人を見ていた。

「うわっ！ し…司教さまっ。いつからそこに」

「いやだなあ。私はアンの為に戦っていたというのに。見ていなかったんですか？ 私の雄姿を」

「わ。ファーター。メル見てたです。ファーター格好良かったでしよ」

メルがふわふわの服を靡かせ、バイロンに飛びついた。

バイロンはそれを受け止め、優しく頭を撫でてやる。

「よくやりましたね。メル。立派な結界でした。さすがは私の娘」
「わーいわーい」

「む……娘っ！」

「あれ？どうかしましたか。アンリ。そんな間抜けな顔をして」
バイロンはメルを抱いたままこちらを見て朗らかに笑っている。確かにこうして見ると親子に見えなくもない。

「司教さま、結婚していたんですか？」

「おつ。ヤキモチですか？何だか照れますねえ。でも安心して下さい。私は聖職者。この身も心も神のものです」

とバイロンは荘厳に言い放つが、どうも胡散臭い。
アンリは半眼で司教を見た。

「あは…あははは。いやですね。何ですか。その眼は」

「だったら私生児って事？認知もせずに恥ずべき行為ですよ」

「アンリ、メルは花妖精だと聞きませんでしたか？」

まだこちらを疑いの目で見ているアンリの視線に耐えかねたのか、バイロンはメルを膝の上に乗せて諭すように微笑む。

「聞きましたけど。それが何か？」

「実は昔、ある知人から妖精の卵を貰いましたね。そこから私が育てたんです。娘と言っても構わないではないですか」

「…………妖精って卵から孵化するんだ」

「そうでし、メル。卵からファーターに育てて貰いました」

メルはそれを誇らしげに言う。バイロンも父親のような顔でその頭を撫でる。

どうもよく分からない関係だ。

「いやあ……。それにしてもアンリにヤキモチを焼かれるなんて感激ですねえ」

「違うつ！」

「わーいわーい！ヤキモチヤキモチい。焼いたら美味しいのでしー。食べるのでしー」

もうアンリは反論をする気力も無かった。

感激で身をくねらす司教と、その周囲を焼くのでしー、食べるのでしーと走り回る花妖精を疲れた目で見ていた。

「それで直接確かめるとか言ってたのはどうなったんです？この村人たちは正直ではないってやつ」

一息ついたところでアンリは思い出したように、墓地にやって来た本当の理由をバイロンに尋ねた。そこら辺の事情は結局なにもされていないのだ。

バイロンもそれを失念していたらしい。

「ああそうでしたね。あれはですね、この墓地に埋葬された被害者の残留思念を読み取って事件の全容を断片でも聞きだそうと思ったんですよ。でも残念ながら先を越されてしまいましたかね」

そう言つてバイロンは掘り起こされた形跡のある墓石を視線で示した。

アンリは怖々その下を覗き込む。

穴の中には何者かの手によつて粉碎された死体だったものが見えた。その死体から上る甘い腐臭が鼻を突く。

アンリは思わず口元を覆った。

「大丈夫ですか？お姉ちゃん」

メルが心配そうにアンリの服の袖を引っ張った。

「あ…ああ。ありがとう。メル」

「見ていて気持ちのいいものではありませんね。まあここまで破壊されていては思念も拡散されて読み取る事は出来ませんね」

「あんたがやつたんだろうがっ！」

「えっ？だって使役されていたとはいえ、こちらに刃を向けてきた

「んですよ。これは立派に正当防衛ですよ」

バイロンには全く罪の意識もないようだ。

アンリは更に続ける。

「その残留なんとかってやつが拡散しない程度に懲らしめれば良かったんじゃないですか？」

するとバイロンは人差し指をアンリの前で左右に振った。

「あー、それは無理です。私ってどんな敵にも全力投球が座右の銘ですから」

「鬼畜司教……」

「今何か？」

バイロンが眼鏡のブリッジを意味深に上に上げる。
アンリは上手く誤魔化そうと下手な口笛を吹いた。

病の少年教皇

繊細な美術品のような建物が建ち並ぶ街、教皇領ヴァチカン。

最盛期にはこの世の全てを治める程の栄華を極めておきながら、今では衰退の一途を辿る。

国民はそれを諦めよりどこか冷めた目で見ていた。

近い将来この国は大きく変わるだろう。

その白亜の宮殿の中、白い天蓋に覆われた寝台には細身の少年が横たわっていた。

重い病の為、その身体はやせ細り衰えていた。
そこから続く肩の線は驚く程薄い。

少年の傍らには黒髪の若い女性が控えていた。

背が高く、すらりとした肢体は華奢で、女性本来の丸みに欠けていたがとても美しかった。

女性の肩のラインで切りそろえられた髪がこちらを向いた瞬間、サラリと首の動きに合わせて揺れた。

「聖下……」

少年は現在の教皇だった。

半年ほど前に病気で前教皇を失ってから即位した少年は、未だ公の場に姿を現した事はない。

ただ日に日に衰えていく少年に付き従う女性、ルビアは悲しげに瞳を閉じた。

「もうすぐ……。もうすぐですから。聖下。もうすぐバイロンがあの娘を連れ帰って来ますから」

ルビアの涙混じりの声に眠っていたとばかり思っていた少年がうつすらと目を覚ます。

そして厭々をするように首を振る。

「ルビア…お願い。もう僕を殺して…。僕はもう生きていたくないよ…」

「聖下っ!」

声は思いの外大きかった。

ルビアはハッとして周囲を見回すが、そこに人影は無かった。ルビアがここにいる間は人払いをしてあるのだ。

「聖下。お願いですからどうかそんな事はおっしゃらないで下さい。あの娘さえ手に入れば聖下はきつと健康を取り戻せます」
すると寝台の上の少年はそつと瞼を伏せる。

「でもルビア…。僕は他人の命を犠牲にしてまで生きていたくない。僕は特別ななんかじゃない。ただのシリアだよ。貴女の弟の…」

その言葉にルビアは喉を震わせて嗚咽を漏らす。

「いえ……。決して聖下を死なせはしません。決して」

少年とルビアしかない部屋は広く、そして冷たい。

それは部屋の温度ではない。彼らを取り巻く空気の温度だ。

そんな部屋で少年はずっと病という名の檻に囚われている。
恐らく死ぬまで…。

「頼むぞ。バイロン卿……」

ルビアの悲痛な声は、声にならないまま幽かな吐息として外に出た。

告げられた真実

墓地から村長の屋敷の離れへと戻る道すがら、バイロンはふと立ち止まる。

「どうしましたか？司教さま」

その後を少し離れた距離で歩いていたアンリもつられて立ち止まった。

先程まで一緒にいた賑やかな花妖精、メルは他にやる事があると言って別れた。メルはバイロンの使い魔だという。一体バイロンに何を命じられたのか気になるところだ。

「いえ…、何かに呼ばれたような気がしまして。変ですね」

心当たりがないのかバイロンは首を傾げている。

どうも言った本人ですらどうしてそう感じたのか理解出来てないようだ。

「変な司教さまですね」

アンリもそれ以上は尋ねなかった。

それ以来二人の間に特に会話は無く、アンリは気まずさから何か手頃な話題を模索してみる事にした。

「あの…。司教さまの髪や瞳ってエーテルコートですよね？」

アンリがバイロンを見て最初に気になっていたのが不思議な色合いの髪と瞳だった。

彼は蒼い光沢を放つ黒髪に、紫の瞳を持っている。

この国は多種多様な人種で溢れているが、こんな不思議な色素を持った人間など存在しない。

だが、昨今それが覆ろうとしていた。

それが先程アンの言っていた「エーテルコート」という戦闘用防具だった。

エーテルコートとは主に傭兵などが扱っていた特殊な防具で、相克の属性に反するエーテルを様々な物に塗布する事によって戦闘を有利にする事が出来る。

それは衣服や鎧や剣を基本に、肌や頭髮、爪、アクセサリ類等多岐にわたる。

それが最近では一般の人間もファッションの一環として利用する者も増えてきた。

街を歩けば戦闘行為が目的でない普通の若者たちが、肌の色や髪、瞳の色を思い思いの色でコーティングしていた。

だが、お洒落や流行に鈍感そうなバイロンの場合は明らかに違うだろう。

「ええ。私は闇の耐性が極端に弱いので、髪と衣服に闇のエーテルを施してます」

「へえ……。じゃあその紫の眼は自前ですか？」

バイロンは黙って頷いた。

闇の中でも鮮やかな光を放つアメジストの瞳は、てっきりエーテルを塗布しているのかと思っていたので意外だった。

「じゃあ本当の髪の色は何色なんですか？」

「さて、何でしょうね。忘れてしまいました。それに本当の「私」

なんてどこにもいないのかもしれませんが」

「？」

振り返ったバイロンの顔は夜風に煽られ、少し淋しげに見えた。

「アンリ……。貴女の敵はこれから本格的に仕掛けてくるでしょう。絶対に私の側を離れないで下さい。私は貴方の「心」を守りたい。誰が何と言おうとも貴女の心は貴女だけのものだ。決して紛いものではない」

「えっ……。それって何の事ですか？ 敵って……」

話は唐突に変わった。

それも意図的といってもいいくらいに。

アンリにはさっぱり分からない事ばかりだった。

「どういう事ですか。司教さま。貴方は何か知っているんですね？ 私の心って一体何ですか。もしかして司教さまがここにやって来た本当の理由って……」

「アンリ、落ち着いて下さい。ですがこれは私が介入しようがしまいが、遅かれ早かれ起こりうる事なのです。ここで貴女がこの村を守護する限り……」

バイロンの紫の瞳が眼鏡越しに射るようにアンリを捕らえる。

「だからそれがどういう事なんですか？。司教さまはこの村に来た時に言いましたよね？ この村へは殺人事件の調書を取りに来ただけだって。違うんですか？」

バイロンはアンリの糾弾にそつと瞳を伏せた。

「ええ。その通りです。表向きはね。ですが私の本当の目的は貴女なんです。アンリエッタ」

「その名は……」

それは意外な告白だった。

「この村の人々は皆、嘘をついています。貴女は騙されている。村の守護者という大義名分で純真な貴女を飼い殺し、時が来たら全ての罪を貴女に被せようとしている。墓地での一件はあそこで貴女を転化させ、私を殺害。そしてその犯行を例の殺人事件と結びつけ、罪をなすりつけるつもりです」

アンリは蒼白な顔で後ずさった。

ざりざりと土を踏みしめる音が冷たい空気に溶けていく。

「そ…そんな事はない。村の皆は優しく、良くしてくれて…。だからそんな事ない」

「彼らを信じたい気持ちは分かります。ですが、これは事実なんです。うかうかしていると貴女が危ない」

アンリは肩に手を置こうとするバイロンを振り切った。
もう何も信じたく無かった。

「いやっ…。いやだっ！」

「アンリ、待つて。一人になつてはいけませんっ」
だがアンリは振り返らなかった。

大きな瞳に溢れそうな涙を浮かべながら走り去っていく。

「困りましたね。今ここであの子を一人には出来ないというのに…」

一人残されたバイロンは白い手袋に包まれた手をきつく握りしめた。

紅い霧の向こう側

気付くと空はすっかり闇に堕ち、月明かりと星々のヴェールが村全体を包んでいた。

「司教さまは嘘をついている」

アンリには先程バイロンの口から語られた悲しい真実が理解出来なかった。

そんな彼と少しでもうち解けたと思っていた事が悔しかった。

バイロンの前を走り去った後、アンリは一人で村をあてどなく歩いていた。

水車のある川縁を歩いていると、いつしか村の大通りに出た。

夜も更けてきたとあって、人通りは全くない。閑散としたものだった。大体この村はこれが普通なのだ。

「あれ…。アンリさんじゃないか。どうしたの？こんなところでバイロン卿はどうしたの？」

突然アンリの背中に声が掛けられた。

その声に胸が騒ぐ。

「アーサー牧師…」

それは昼間別れたアーサー牧師だった。

真の闇が人気のない広場を漆黒に染め上げ、橋の上から見る牧師は美しかった。

長い金髪が微風に煽られ、端正な面が月明かりに照らされる。

それはとても神秘的な事のように思えた。

アンリは知らず知らず、牧師の方まで歩いていく。

その下には紅い霧が立ちこめている事にも気付かずに……。

「本当にどうかした？ぼんやりと歩いてたからどうしたのかと思つてね。顔色悪いよ？」

牧師は優しい微笑みを浮かべたままアンリの頬に触れた。

牧師の手はひんやりとしていた。

「あ、いえ。その……。何でもありません」

「本当に？」

「はい。あのつ……」

牧師は尚も心配そうに蒼い瞳で見つめ返してくるが、アンリにはそれがかえって居心地が悪い。だからといって下を向こうにも、まだ牧師の手はアンリの頬に添えられたままだった。

「ああ……。ごめんね。大丈夫？」

それに気付いた牧師はそつと頬から手を離す。

アンリはほつとしたように頷いた。

牧師の手の感触が離れた事は少し残念なような気もしたが。

「バイロン卿はどんな人だい？アンリさんに優しい？」

唐突に牧師がバイロンの事を口にした。

まさか牧師の口から尋ねられるとは思っていなかったアンリは戸惑いの表情を浮かべる。

「どんな人って……、ちょっと変わった人だと思います」

それはちよつとどこの範疇ではないのだが、取りあえずそこは飲み込む。

「ふうん。そうなんだ。でも彼は僕から見ても面白いよね。弱さを必死に隠しているところなんかさ」

「え…、アーサー牧師はバイロン司教の事を知ってらっしゃるんですか？」

間髪入れずにアンリが牧師に聞き返すが、牧師はそれには答えない。

「知っているともしえるし、知らないともいえるよ。彼と僕は表裏一体なのさ」

意味深とも取れる謎の言葉を呟き、牧師は青みがかった目を仰ぐ。その横顔は普段村の子供たちに見せるものとは違い、刃物の切っ先のような鋭さと冷たさを持っていた。

「それってどういう意味ですか？」

「さあ、夜も更けた。君はもう帰りなさい」

「アーサー牧師っ！」

大切な事は何一つ話さずに牧師との会話は唐突に終わった。こういうところはバイロンにそっくりだとアンリは思った。

「……いいね。アンリさん」

「はい。アーサー牧師」

仕方なくアンリは頷く。

「ごめんね。難しい事を言っただけ。僕が言いたい事は君が心配なんだって事だよ。バイロン卿を信じたいならそうすればいい。だけど僕はいつも君を大切に思ってるから。それで君が傷つくのを見るのは悲しい。それは村の皆も同じだよ」

気付くと牧師の手はアンリの頭の上にあった。

くしゅくしゅと髪をかき混ぜられるうちに、自然とアンリの顔に笑みが浮かぶ。

「もう…、やめて下さいよ。アーサー牧師っ」

「ふふふ。元気になったようだね。もう大丈夫そうだし」

そう言っていると牧師は手を引く。締め。

「はい。ありがとうございます。それではお休みなさい」

「うん。お休み。アンリさん」

牧師はアンリの笑顔を見届けると、そつと踵を返した。

「心配してくれてるんだな。アーサー牧師は。うん。大丈夫だ。この村の人は絶対に私を裏切ったりしない」
そう思うと少しだけ心が軽くなった気がしてきた。

いつもならここで森に帰るところだが、やはり先程喧嘩別れのようになってしまったバイロンの事が気になった。
彼の真意も気になっている。

アンリはアーサー牧師と話した事で幾分落ち着きを取り戻し、彼の事も今なら許せるような気がしたので、彼の滞在する村長の屋敷の離れを訪ねる事にした。

「あれ……、司教さま。いない……」

一応ノックした部屋に入ってみたが、そこにバイロンの姿き無かった。

その上、彼の持ち込んだ荷物すらもない。

確認の為、寝台に触れてみたが、シーツには温もりもなく、使った形跡すらなかった。

「まさか司教さま、暁の吸血鬼に？」

そんな事はないと思ったが、あんな別れ方をすれば気になる。
アンリは離れを飛び出した。

「おや、アンリ。こんな夜更けにどこにいくんだい？」

バイロンが心配で、離れから飛び出して来たアンリに何者かの声が掛かった。

声からして中年から老年の男のようだ。

声は手にした油ランプの光と共に近付いていく。

「あ、村長さま」

「夜更けに外には出てはいけない。知っているだろう？ 暁の吸血鬼を。最初の犠牲者が出たのもこの村だ。まだまだこの村は安全ではないんだ。注意しないと……」

「すみません。村長さま」

でっぴりとした下腹部を革ベルトの上に乗せた体型の村長は、アンリを家の中へ入れようと無理矢理肩を抱く。その力は尋常ではなかった。

次の瞬間、アンリの身に熱い衝撃が走った。

「つつっ！」

首から下にかけて熱い痛みが走る。

ぼやけていく視界の中、アンリは信じられない思いで村長を見た。村長はそんな苦しみに耐えるアンリを見て嗤っていた。

「ふん。悪く思わないでくれよ。この悪魔め。これもこの村の為だ」

身体に力が入らない。

麻痺した身体はそのままずるずると村長の足下に崩れていった。

暗い眼をした村長は、足下に横たわるアンリを軽々と抱き上げ、灯りの灯らない家に引き返して行った。

辺りには一面、湿った紅い霧が立ちこめている。

その紅いヴェールが晴れた後、そこには先程まで真っ暗だった筈の窓に、明かりが灯った屋敷が浮かび上がった。

先程まであつた無人の離れは夢か幻のようにかき消えている。

そして明かりの灯つた離れの窓からは、アンリの身を案じるバイロンの姿があつた。

追想の森

雨が降っていた。

次の日も、また次の日も。

銀の糸を張った蜘蛛の巣に透明な雫が散らばり、光を反射させる。さながらそれは自然の作った緻密なモザイク画のようだ。

見つめる先は鬱蒼とした森。

虚ろな瞳はただじつと森を見据えている。

ただ黙って窓から森を見ているバイロンの表情は虚ろだった。

そんな彼の前に、控えめなノック音が響く。

だがバイロンはそれに何の反応も示さない。

ただ空虚な紫の瞳は窓に向けられたままだった。

「バイロン、入るよ」

遠慮がちな声がかかり、小柄な少年が姿を見せる。

仕立ての良い金糸銀糸で装飾された衣服の裾が視界に入る。続いてひよっこりとプラチナブロンドの頭が覗いた。辺りを窺うように滑り込んだ身体は細く、薄い緑の瞳にはやや怯えに似た色が混じっている。そして病的といいいい程、白すぎる肌は青ざめてすらいた。少年の名はシリア。彼がここにいるバイロンに全幅の信頼を置いている事は、態度で分かる程明らかだ。

彼が教皇として立つ事になるにはもう少し後の話になる。

その声バイロンは顔だけこちらを向いたが、視線が交わる事はなかった。

しかし、乾いた唇が幽かに動いたような気配がした。

少年はその唇から零れる音を聞き漏らさないよう、耳を研ぎ澄ませる。

「何？バイロン。何て言ったの？」

「フィリア……は？」

その名は女性の名だった。彼の大切な唯一の存在。

少年は思わず息を呑んだ。

事実を彼に伝える事は酷な事だと分かっていた。だけどそれを先送りにしても辛いだだけだ。

長い沈黙の後、少年は意を決したように息を吸い込んだ。

「バイロン……、彼女は死んだよ」

……カノジヨ　ハ　シンダヨ

バイロンの瞳が激しく凧いだ。
だけど少年は言葉を続ける。

「ねえ、バイロン。フィリアがあんな事になって悲しいのは分かるけど、少しは元気出してよ。その喪服だっけと着たまま着替えてもないし、髭もこんなに伸びちゃって……。こんなのバイロンらしくないよ」

「フィリア……。どうして……フィリア」

「バイロン！」

何かに取り憑かれたように彼女の名を繰り返すバイロンを少年はぶつかるように抱き込んだ。

「お願いだよ。お願いだから戻って来てっ！うっ……ゴホッ、ゲホ

ツゲホッ」

少年はバイロンの胸の中で、苦しげに咳をした。また発作がぶり返したのだろう。

少年の身体は生まれつき弱く、そう長くは生きられないと医者に言われていた。

それなのに、今日の前の少年はこうしてバイロンを気遣ってくれている。

バイロンはそんな不甲斐ない自分を心の中で恥じた。

だから震える手を伸ばした。

そして無理矢理微笑む。

我ながら不器用だと思った。だが今の自分にはこれが精一杯だ。

「ありがとう。僕は大丈夫です。まだ生きていられます」

「バイロンっ！」

少年は苦しげに顰められた顔を期待に満ちたものに変え、こちらを見上げてくる。

それを見たバイロンは、胸が締め付けられるような痛みを感じた。

「ええ。貴方に元気を分けてもらいましたから。その代わり、貴方が苦しい時には僕が貴方をお助けします。必ず」

「ありがとう。バイロン。でも僕の苦しみはきつと誰も肩代わりする事は出来ないんだ」

「はい？」

「ううん。何でもない。忘れて。バイロン」

少年は花のような笑顔を見せる。だけどどこか淋しげな笑顔を。

彼にはまだ隠している事があるのだろう。

だけど、それをここで問いただす事は出来なかった。

それに今の自分にはそれを受け止められる程の心の余裕は残ってなかった。

「はい。分かりました。では、そろそろルビアの元へ戻りましょうか。ローマへの道のりは遠いですよ」

「うん」

少年は最後にバイロンが覗いていた窓を見上げてみた。

雨の降りしきる向こうは黒き森と呼ばれる魔の森が広がっている。

鬱蒼とした木々の向こう。

確かに「それ」はいる。

「さようなら、僕の「半身」。出来ればもう二度と会う事もないように……この痛みは全て僕が引き受けるから」

ざわわ…。

緑の葉擦れが響く。

まるで少年の言葉に呼応したかのように。

原罪の烙印

それは長く、そしてとても短い夢だった。

自分の夢だというのに、まるで他人の夢を見ているような違和感を覚える。

それは活動映画を見ているような第三者的感覚。

でもそれでいてどこか懐かしい。

自分は以前、この光景を見た事があるのかもしれない。

「アンリ、アンリさーんっ……………」

どこからか声が聞こえる。

続いて軽く頬を叩かれた。その刺激で段々と意識が明瞭になっていく。

「うつ…………うつ」

「アンリ、良かった。気付いて」

…………ガバッ

半覚醒状態のうちにアンリはバイロンの胸に抱かれていた。

それを感じた途端、アンリの顔が一気に紅くなり、即座に身を離れた。

「しっ…司教さまっ。これは一体何ですか？朝から…」

「えっ、やだなあ…。アンリさん、今はもう夕方ですよ」

バイロンはそう言って入口の大きな扉を指さす。

扉は開け放たれていて、外から夕暮れが射していた。

「本当だ…………つてれね？ここはどこです？」

慌てて自分の身を検めるが、衣服に乱れは無く、黒いタイもきっちり

りしている。

身体の方も特に何ともない。

ただここがどこかだけが分からない。

手に触れるのは柔らかな干し草の感触のみ。

そして簡素な板を貼り合わせただけの小屋のような建物。天井がやけに高い。

天辺には小窓があり、そこから金色の光が差し込んでいた。多分、村からは出ていないと思うが不安はある。

「ここは農機具や飼料を保存しておく為の倉庫ですよ」

バイロンが後からそう教えてくれるが、アンリにはここへ入った時の記憶が全く無かった。

どうもバイロンと別れてからの記憶が曖昧だった。

先程から頭がぼんやりして、微かに痛む。

「大丈夫ですか？立てますか？」

「ええ。大丈夫です。それより私には司教さまと別れてからの記憶がないんです。それってどういう事なんでしょうか」

言葉はそこで途切れた。

アンリの瞳がバイロンの足下に横たわる物体に縫い止められる。

「あの…、それって何ですか？」

一目見ればそれが何であるかは分かる。分かり切った事だった。でも聞かずにはいられない。

喉がカラカラに乾いた。

「アンリ、事態は最も深刻な方向へと向かいました」
眼鏡を押し上げてバイロンは立ち上がる。

するとその物体が何であるかがはつきりと分かった。
それはまだ若い…それも子供の死体だった。

可愛らしいエプロンドレスを纏った少女というより幼女といった方がいい。

蜂蜜色の艶やかな髪は血を吸って、すっかり錆色に凝固し、その輝きは失せていた。

血の気のない顔は恐怖に彩られ、緑の瞳は見開かれたまま固まっていた。

その細く白い首筋には二つの吸血痕が残されていた。

「レイナ…。レイナじゃないかっ！どうしてこの子かっ」
よろよるとアンリは少女の亡骸の前に跪く。

教会の日曜学校では誰よりも元気に賛美歌を歌っていた少女だった。アーサー牧師が大好きで、いつも彼の後を付いて回っていた。それが今はこんな無惨な姿でアンリの前に横たわっている。

「バイロン司教っ！誰がこんな事をつ！」

「落ち着いて、アンリ。ここは……………」

バイロンが取り乱したアンリを落착かせようとするが、アンリはそれを聞き入れようとしない。ただ爛々と輝く瞳で肩を激しく上下していた。

「誰がやったんだ。こんな事っ！この子に何の罪があった…。何でこんな小さな子供がっ！」

干し草に覆われた地面をアンリは力任せに叩き付けた。

だけどそれはポフポフと頼りない音を発するのみだった。

「誰がとですか？この惨劇を引き起こした張本人が何を言う」

「！」

今までだれも立っていなかった大きな扉の前にいつの間にか大勢の村人が詰めかけていた。

村長を筆頭にアーサー牧師の姿まである。

「村長さま？」

突然の事態に放心したようなアンリをバイロンが庇うように前に立った。

「アンリ、お前には失望したよ。「あんな事件」があつてからも我々はお前の犯した罪を赦し、村の一員として迎えたというのに」

「一体、何の事ですか？」

アンリの顔は蒼白だった。

だが、そんなアンリを前に村長は尚も尊大な顔で詰め寄る。

「はつ。何のとは良く言えたものだ。それを見て分からねとは言わせないぞ」

村長は視線で少女の亡骸を示す。

「そんなつ！私はやってません。信じて下さい」

「戯れ言を。この倉庫の持ち主のハンナが早朝、仕事の為にここを開けると血まみれのレイナと同じ、返り血を浴びたお前が倒れていたという」

「嘘だ…。私はそんな事しない」

アンリはさすがのようにアーサー牧師を見た。

しかし牧師の表情は冴えない。

「アンリさん。その爪はどういう事かな？それでは僕も貴方を庇いきれないよ」

「牧師さ…ま？」

アンリは恐る恐る自分の爪をしてみる。

「！」

爪を見てびっくりした。

自分で出した覚えもないのにその爪は、悪魔に転化した時に現れるものに変わっていた。

そしてその鋭い切っ先には既に凝固した血液と、少女の衣服の切れ端が引つかかっていた。

「違うっ！違いますっ。牧師さま。私はこんな事しません。信じて下さい。お願いですから」

アンリは嫌々をするように首を振り、自分の頭を抱えて膝を折った。しかしアーサーは憂いの表情のまま、アンリから顔を逸らしていた。

「さあ、逃亡される前に市警に引き渡してしましましょう」
最早、村人たちの誰にもそれを止める者はいなかった。
あるのは異形を見るような冷たい視線のみ。

「まあ、待つて下さい」

そんな時、妙に暢気な声を発したのは今まで聞き役に徹していたバイロンだった。

「何を司教さま。こいつは殺人を犯した重罪人ですよ」

「まあまあ。落ち着いて。まだアンリがやったとは言い切れないでしょう？それに私はこの事件を調べに来たのです。全権をひとまず私に預けてはくれませんか？」

ニコニコと人の良い笑顔を浮かべて揉み手をするバイロンに、周りが気色ばむ。

「いいや。折角だが司教さま、これは我々の村での事。いくら司教さまでも…」

「ですがこれはアンリの仕業ではありませんよ？」

「何っ？」

やけにあっさりと、とんでもない発言をしたバイロンに、村人たちもアンリですら呆然としていた。

「どういう事ですか。司教さま。現場にいて、しかも凶器まであって。これのどこが」

「まあまあまあ…。ちよつと見て下さい」

そう言つてバイロンは少女の亡骸に十字を切ると、そつと手を掛ける。

「な…何をなされる。バイロン卿っ」

牧師が制止の声を放つ。だが彼はそれを聞き入れない。

彼は跪き、遺体を隅々まで調べ、最後に「やっぱりか…」と呟いて立ち上がった。

「見て下さい。彼女の死因はこの鉤爪状の傷からくるものではありません。出血が傷の割に少ない。生きていたらもつと出血が酷かったと思われます。ですからこの傷は少女が亡くなつてから得たものでしょう」

「それが何の関係があるつ。レイナは現に死んでいるじゃないか。その傷が直接の原因でないにしてもだ！」

いきり立つた村人が激昂する。

そして何人かがバイロンに詰め寄つた。だが、バイロンは涼しい顔をしていた。

「いいや。違いますね。関係大ありです」

バイロンは村人たち全てをぐるりと見渡す。そして口を開いた。

「アンリは「聖氣」しか食さない。つまり、血液は吸いません」

そう言つてバイロンはアンリの手を取つた。

しっかりと絡められる指と指。

「な…。こんな時に何をっ！」

アンリは慌てたが、絡められた指先から仄かに力が満ちていく。次第にアンリの顔色に朱がさしていく。

「だからどうしたんだよ」

先程の男がまだ言いつのる。

「まだ分かりませんか？」

バイロンはやれやれと言ってアンリから身を離した。

そして再度跪き、遺体の首筋を露わにした。

「この少女の直接の死因は失血死。この首筋の吸血痕から致死量の血液を短時間のうちに奪われたのです」

「だからアンリがその吸血鬼の正体かもしれない」

ぶすつとした顔で、頑なに意見を曲げない男にバイロンは肩を竦める。

「アンリは吸血鬼ではありません。あんな下等な魔物と一緒にされたくないですね」

「どういう事だよ。俺は知ってるぞ。そいつは昔、この村を襲ったんだぞ！」

「！」

アンリの身体がびくつと強張る。

それはずつと封印したかった過去の罪。

それが今この場でまた晒されようとしている。

暴かれてしまう。

この最後まで自分を信じてくれようとしていた司教に知られてしまう。

これで自分の見方は誰もいなくなる。

次第にざわめく村人たち。

既に村では周知だったものの、確信に至るものではなかったのだが、それが事実と分かった途端村人たちはアンリから距離を取った。そして口々に恐ろしいだの化け物だのと囁いた。アンリはぐつと涙が出ないように瞼を閉じる。

「醜い？恐ろしいですか？…ですがそういうお前たちはどうなんです？薄汚い皮袋に腐った臓物と欺瞞を詰め込んだ下劣な生き物だ。お前たちの方がずつと恐ろしく、醜くはありませんか？」

「な…あんだ、何言つて……」
ただならない司教の乱心に村人たちは冷水を浴びせかけられたように静まった。

その顔には恐怖が浮かんでいた。

「行きましょう。アンリ」

バイロンはアンリの肩を抱く。

今度は抵抗しなかった。

その遠ざかる二人の背に再び罵倒が飛ぶ。

「このままでいいと思うなよ！殺人鬼っ」

「化け物っ！」

「ううっ……」

残酷な罵倒にアンリの足が止まりそうになる。

「大丈夫です。そのまま進みなさい」

アンリの全身を包むようにバイロンが背中を抱く。

「でもっ……」

「アンリ、転化しなさい」

「えっ……そんな」

「もう誤魔化す必要はありません。今はこの場を一刻も早く去る事が先決です」

確かに村の暴動は限界まで達していた。

これ以上は身の危険すら感じる。

アンリは弱々しく頷いた。

………バサッ

アンリの背に黒い猛禽類のような翼が現れ、バイロンを抱えて飛翔した。

金色の夕暮れに漆黒の翼がはためく。

地上では村人たちの罵倒の声が今も続いている。

「ちっ。逃がしたか」

それを舌打ちして悔しがる村長を見て、アーサー牧師が含み笑いを漏らす。

（ふふふ。中々良い芝居じゃないか。バイロン。だけど全てはシナリオ通りだよ）

（さあ…バイロン。君はどう出る？）

原罪の館（前書き）

村を追われるように脱出したアンリたち。

その彼らの前にアンリが夢で見た館が姿を現す。

そこには、バイロンの隠された過去が眠っていた。

原罪の館

「いやあ、アンリは力持ちさんですねえ。私を軽々と持ち上げてこんな場所まで運べるとは」

アンリの気持ちを推し量ったの事か、バイロンは普段より更に饒舌になった。

ここはアンリの根城にしている黒の森の北東部。ここまでは村人たちも気味悪がって追っては来ないだろう。身を隠すには最適な場所だ。

そこでやっと安堵を覚え、アンリはその場に座り込んだ。

「お姉ちゃん、大丈夫でしか？」

不意に膝に微かな重みを覚えた。それはこちらを心配そうに見上げるメルだった。

「メル…、ありがとう」

「お姉ちゃん、何か悲しい事があったんでしか？元氣ないのし」

「大丈夫だよ。私は元氣だ」

アンリはぎこちない笑みを浮かべて、メルを抱きしめた。

「あの…、司教さま。あの時は私がやったのではないと信じて下さり、ありがとうございます」

ずっと言わなければと思っていた言葉は自然に出てきた。

それはアンリの今の素直な気持ちだった。

アンリは赤面しながらも、どうにかそれだけ伝える事が出来た。

「わかってますよ、アンリ。貴方の魂が汚れなく純粹である事を」

「そうでし。お姉ちゃんは悪くないでし」

二人の言葉にアンリは目頭が熱くなるのを感じた。

「司教様っ、メルっ」

するとバイロンはにっこりと笑った。

「アンリ、私の事はバイロンとお呼び下さい」

そこでようやくアンリの口元にも笑みが宿る。

「わかりました。バイロン」

そう言うと、急に気恥ずかしくなり、不自然な沈黙が訪れた。

するとアンリは、どうしても彼に聞いておきたいと思っていた事があつたのを思い出した。

それを口にするのは躊躇いがあつた。

だが、ここで聞いておかないと、もうこの先、彼に尋ねる機会はないだろう。

そう思ったら、それはもう声に出ていた。

「バイロン、フィリアって誰ですか？」

バイロンの表情が一瞬にして硬くなるのをアンリは見た。

そこには動揺と焦りが滲んでいる。

「どこで、その名を？」

「それは…、その…こんな事を言つて信じてもらえるか不安だけど、夢で見たんです。雨の日にバイロンと子供が、フィリアという人の事を話しているのを……。もしかしたらバイロン、知らないかなって思つて」

バイロンは無言だった。

アンリは口にしてから、言つた事を後悔し始めていた。

何となく、彼の様子からは触れて欲しくない話題のように思えたからだ。

だが、ややあつてバイロンは口を開いた。

「あの日、あの館で私は私を棄てたのです」

バイロンは、ずっと片手を上に上げ、どこかを指し示した。それは森を抜けた先に広がる、崩れかけた廃墟だった。

「アンリ、一緒に行ってもらえますか？」

バイロンの過去

「あの…、ここって幽霊とかは出ませんよね？」

廃墟を前にアンリは、消え入りそうな声でバイロンに問いかけた。

「おや？いつも勇ましいアンリが、実は幽霊が苦手でしたか」

「ち…違います。別にそんなの怖くなんてありません」

バイロンはからかうように笑っている。

先ほどよりも大分落ち着いたようで、表面的にはいつものバイロンだった。

それでアンリの方も緊張が幾分解けた。

「では、入りましょう」

バイロンが扉に手を掛けた。

キィ…

鈍い音を立てて扉が開く。

「わぁ……」

そこはアンリが夢に見た屋敷そのものだった。

白い壁には幾つもの小さな窓が規則的に並び、精緻な硝子細工のシヤンデリアが天井を優しく彩っている。そして、中央にある、滑らかな曲線を描く階段は二階へと続いていた。

大理石の床に敷かれた天鵝絨の絨毯は、長い年月ですっかり湿っていたが、一級品だった事が伺える。

どれもが素晴らしい調度品であふれていたが、それらはすっかり風化して雨ざらしになっていた。

壁や窓に空いた穴からは、今でもすきま風が漏れていた。

「ここですよ」

バイロンは広間へ続く扉を押し開いた。

キィ……。

アンリは目の前に広がった景色に釘付けになった。

「わぁ……。これ、夢で見たままです。この窓からの景色も同じだ」
つい広い部屋を走ってしまふ。

すっかり風化して、退色した窓の棧に触れ、アンリは夢との相違を確認していった。

それは間違い探しをしているような気分にした。

「不思議ですね。この屋敷の中はほとんど夢で見たものと同じです」
するとバイロンは首を振った。

「それは不思議な事ではありませんよ。アンリ」

バイロンはゆっくりとした足取りでアンリの目の前に立つ。

窓から漏れる月明かりに、彼の端正な面差しに微細な陰を作る。

「バイロン？」

「貴方は私の古い記憶を見たのです」

彼はアンリの横を通り過ぎて、窓辺に寄った。

そして、何かを懐かしむように、硝子を失った窓の棧に触れる。

「あの夢にはバイロン、貴方もいた。では、あれは貴方の過去？
もどうしてそれを私が……」

「貴方に見せたかったのではないですか？私の至らなかった過去の
姿を……」

そう呟いたバイロンの横顔には、深い悲しみがあつた。

「それは、一体誰が……？」

アンリはやつとの思いで声を出す。

「暁の吸血鬼……。私がヴァチカンより受けた密命の首謀者」
「はっ……」

次の瞬間、アンリは全身を雷で貫かれたような衝撃を受けた。

そして、震える声で尋ねる。

「まさか、それがレイナを襲った犯人ですか？ならば、その犯人はバイロンと知り合いという事になります」

バイロンは何も答えなかった。

だが、アンリはそれを肯定と受け取る。

「いいですか、アンリ。良く聞いて。暁の吸血鬼、アレクセイは私の義兄です」

「義兄……？」

アンリの顔から表情が消えた。

「厳密にはまだ契りは交わしてなかったたので正確には違いますが、私は今でも彼を義兄だと思っています」

バイロンはこちらを振り返った。その顔にはまだ寂しさが滲んでいるが、懐かしんでもいるようだ。

「私とアレク、そしてアレクの姉、フィリアは幼なじみでした。私たちはずっと一緒でした。私が父の都合でヴァチカンの寄宿舎に入られるまでは」

「フィリア……？」

それは夢に出てきた名前だ。

「フィリアは私の婚約者でした。私が寄宿舎生活を終え、結婚式の当日にアレクに惨殺されました」

「そんな……どうして。酷い……」

「さあ、どうしてなのでしょうね。ただ、私とフィリアは彼に祝福してもらえなかったようです」

バイロンはそっと、床に座り込んでしまったアンリに手を差し伸べる。

アンリは素直にその手を取って立ち上がる。

……今でも彼女を愛しているから、今でも忘れられないから、その

黒衣を纏っているの？戦闘用エーテルコートとは言っていたが、本当は喪服のつもりなんだ……

どうしてか胸が痛かった。

自分の踏み込める領域ではない彼の秘められた過去を知った事の痛みなのか。

「祝福されない？そうだね。バイロン。お前たちは結ばれても幸せにはなれなかったんだから」

「！」

屋敷の中、それもバイロンたちの他に人の気配がある。

それも不意にだ。

すぐにアンリは反応して上を仰いだ。

「バイロン、上です」

アンリの声と同時に天井のシャンデリアが大きな音を立てて落下した。

バイロンはメルを抱え、アンリは瞬時に魔物、地獄の番犬ケルベロスに転化して、見えない敵に向けて炎を吐いた。

「ふふふふ。アンリさん。いつ見ても鮮やかな転化だね。その力が何なのかも知らないのに」

落下したシャンデリアの向こうに淡雪のような金髪の青年が降り立った。

天使のように透き通るような容貌。

「アーサー牧師さまっ！」

彼はアンリを見ると、甘い笑みを浮かべた。

「君を迎えに来たよ。魔物の御姫さま」

牧師の素顔

バイロンが素早くアンリの前に立ち、剣を素早く顕現させてアーサーの攻撃を弾いた。

キン…

「アンリ、下がって」

「でも、バイロン……」

漆黒の犬の形態を取っていたアンリは吠えるように反論する。

しかし、前方に出たバイロンの表情は厳しい。

「ふふふふ。バイロン、逃げても無駄だけど止めはしないよ。僕はアンリさん。君に用があるんだ」

牧師がヒラリと降り立ち、バイロンに蹴りを放つ。

バイロンはそれを紙一重で避けて、死角から打ち込む。

しかしアーサーはそれすらも避けてしまう。

「強い……」

「アンリ、ここは私が食い止めます。貴方はここから出来るだけ遠くへ逃げて下さい。メルが結界を張ったし場所があります。いいです。メル」

バイロンの呼びかけにメルが力強くうなずく。

「はいでしっ！ファーター」

メルは頬を桃色に染めて、アンリの手を引く。

しかしそれを見逃すアーサーではなかった。

彼は懐から取り出したナイフを数本、陽動としてバイロンに向けると、真っ直ぐに金の髪を靡かせ、二人に向かった。

その手には、バイロンと同じ輝きを持った精神剣がある。

それがアンリとメルの喉元まで迫った。

アンリはメルを庇うように背を向けた。

ザシュッ…

その瞬間、もの凄い剣圧が身体にかかる。

アンリは自分が斬られたと錯覚した。

そしてじっと、やがて訪れる激しい痛みに身を固くするのだが、その痛みはやってこなかった。

メルを抱く腕を緩めつつ、アンリは瞼をゆっくり開けてみた。

「バイロン！」

自分の前方には剣を構えた自分たちを守るようにバイロンが立っていた。その手は血に染まっている。

ポタポタと腕から鮮血が溢れて伝う。

アンリはメルを壊れた窓の外へ押しやった。メルは姿を光に変えて飛び立った。

「早く逃げなさい」

苦しそうに息を乱し、バイロンはこちらを振り返らずに声を絞り出した。

「だけど、バイロン……」

「相変わらず献身的だね。君は。だけど君は今回も守れないよ」

仄かに赤く輝く剣を手に、アーサーは今まで見せていた穏やかな笑みを消して、憎悪に満ちた暗い笑みを見せていた。

その瞳の輝きは、暁の吸血鬼と呼ばれた魔物そのものだった。

「まさか、牧師さまが吸血鬼だったなんて…」

「驚いた？でも君と僕はそんなに変わらないんじゃないの？」

「何っ？」

「アンリ、彼の言葉を聞いてはなりませんっ！」

アーサーは剣をアンリに振り上げる。アンリはそれを爪を合わせる事で防御した。

キンッ

「ああ、本当に煩いな。バイロン。今回君の出番はないよ。あの時と同じくそこで寝ていればいいんだよ」

牧師の攻撃からアンリを守るバイロンに、アーサーは秀麗な貌に決面を刻み、剣を垂直に構えた。

「バイロンっ！」

アンリが叫ぶと同時にバイロンの身体が宙を舞った。

鮮やかな紅の軌跡を描いて。

ドサッ

朽ちた寝台の上に落下したバイロンにアンリは駆け寄る。

彼の口からは絶えず鮮血が溢れ出し、致命傷足りうる腹部の傷からも血が滲み出していた。

「……私は大丈夫。それよりアンリさん。貴方を彼に渡すわけにはいきません」

そう言つて、バイロンは立ち上がる。

鮮血がその動きに合わせてポタポタと床の上に落ちる。

「無理だよ。バイロン。そんな傷で動ける筈ないっ」

「その通りだよ。無理は禁物さ。バイロン」

その時、いつの間に背後に立ったのか、アーサーが天使のような笑顔を浮かべ、剣を寝台に突き立てようとしていた。

バイロンは素早くアンリを抱え、すぐに身体を反転させて床に転がった。

その瞬間、先程までバイロンがいた寝台は真つ二つに寸断された。

「アンリ、こちらへっ！」

そしてバイロンは片手をアンリへ向けて伸ばした。アンリは躊躇う事なくその手を掴む。

そのアンリの手には何か小さな物を滑り込ませた。

「バイロン？」

「アンリ、よく聞いて下さい。この剣を貴方に託します。零式は唯

一持ち手を選ばない特殊な精神剣です。きっと貴方にも扱える事でしょう。これを持ってあの窓からお逃げなさい。途中でメルと合流してより安全な場所へ行くのです」

そう言つて、バイロンは剣だというのに何故か銀の口ザリオを握らせた。

「これは？」

「それが零式です。必要に応じて自分に適した武器の形態に変化します。貴方の転化は大きなエネルギーを消費します。だから出来るだけ転化に頼らずにこれでしのいで下さい」

「でも、バイロンはどうするんですか」

「私にはこのアインスがあります」

バイロンは血まみれの手袋に包まれた手をそつと開く。蒼の光と共に花のように美しい剣が現れた。

その剣の刀身にはフィリアの名前が刻まれていた。

「分かりました。気をつけて…そして、死なないで」

「ええ。アンリもですよ」

バイロンが側に寄つて、アンリの額と唇に軽く口づけた。

微かな血の味と一緒に温かな聖気が口中に広がる。

瞬間、二人は別方向へ飛んだ。

アンリは窓へ。

バイロンはアーサーに向けて。

宝貝の剣士

アンリは走った。暗い夜道をひたすらに。

バイロンはどこかにメルが待機していると言っていたが、中々会えない。

その不安とバイロンの安否が気になって、気持ちバラバラになりそうだった。

「メルっ！どこにいるーっ」

森はやがて開けて明るくなった。シュバルツバルトの森を抜けたのだ。

だが、相変わらずメルの姿は見えない。

「メルっ、いるのか？メルっ」

「やはりあのお方の言った通りだ。お前は必ずここに来ると」

その時、森の陰からいくつもの人影が現れた。

中年太りの目立つ腹部のシルエット。それに農機具を武器代わりに構えた村人達の姿。

「村長さま……。どうして、ここに？」

思いもしない人々の登場に声が掠れた。全身を冷たい汗が伝っている。

「全てはアーサー牧師から聞いたぞっ！黒き森の悪魔っ！お前は暁の吸血鬼と結託した、ドイツやローマに跨る連続殺人の犯人だっとな」

「私はやっていないっ！ここから余所の国へなど出た事もないのに」
「嘘付けっ。この悪魔め。じゃあ何でレイナは死んだんだ？お前以外に考えられないじゃないか」

その言葉はアンリの胸に深く突き刺さった。

言った本人である村の青年も、それが分かったのか気まずそうに口を閉じた。

彼はこの間までアンリに気さくに話しかけていた。時間があれば一緒に聖書について話したし、共に夕飯だって食べた。それがこんな行き違いで簡単に壊れてしまうなんて。

「ええい。ごちゃごちゃと話をしても解決にはならん。皆、アンリを捕まえるんだ」

村長が苛立った声で口火を切った。

その声に皆が我に返り、それぞれ手にした武器を構える。

「皆……」

アンリはそつと瞼を閉じた。

胸にはバイロンから借り受けた剣を抱く。

だが、彼女には剣を使う意志は無かった。

誰かを傷つけてしまうよりも、自分が傷つく方を選んだのだ。

ザシュツ。

「うわああああああつ！」

一瞬、目の前を風が通り過ぎた。

眼を開いたアンリの前に鮮血が飛沫を上げた。

そして、村の青年がゆっくりと倒れていった。

「バイロン？」

加勢するかのように目の前に立った長身の男を見て、アンリはつい期待の込められた瞳で見上げるが、それは裏切られた。

男は初めて見る顔だった。

極東にある島国で見るような裾の広がった独特な風合いの着物で、前を左右に合わせて、それをベルトのような布で締めている。そして一番眼を惹いたのが顔の半分には青い入れ墨だ。何かの呪いなのかもしれない。

青年はアンリを横目に見た。その目元は涼やかで隙がない。

「小娘、助太刀してやる」

「えっ？」

青年の服の裾が大きく膨らんだと思うと、彼の姿は一気に加速した。向こう側が透けて見える不思議な空色の長い髪を靡かせ、青年の剣が村人達に迫る。

ザクッ……。

シュッ……。

その剣技は鮮やかで苛烈。それはバイロンの戦法とは全く異なっていた。

バイロンのようなパフォーマンスを意識した派手な動作は一切無く、余計な動きも隙もない、実に実践的な剣技だった。

だが、剣の構えや形状はこれまでアンリが見た事のないものだった。青年はあつという間に大勢取り囲んでいた村人達をなぎ倒していった。

ある者は橋を飛び越えて川に落ち、ある者は空中高く剣圧で飛ばされ、樹木に引っかかっていた。

「こ……これはやり過ぎじゃ」

青年の鬼神の如き躍進に、アンリは引きつった顔で声をかける。だが、青年は興味がないと言う風に視線を逸らせた。

「俺は「木刀」宝贝だ。よって殺傷能力は皆無だ」

「？」

青年の言っている言葉の意味が分からない。

しかし、青年はそれ以上説明する気はないようだ。表情の読めない顔でアンリの手首を掴んだ。

「行くぞ……」

「はい？」

青年はそのままアンリを引き寄せ、細い腰を掴むと思い切り高く飛び上がった。

「ひゃああああっ、な……何をするっ。それに貴方は何者なんだ」

「バイロン卿の元へ戻るぞ。それから俺の名はリヤンだ」

必要事項を事務的に伝えて、リヤンと名乗った青年は森を後にした。

「あ、お姉ちゃん」

シユバルツバルトの森へ降り立ったアンリとリヤンはメルが下で手を振っているのを発見すると、ゆっくり降下した。

「メル、無事で良かった」

「はいでし。メルは大丈夫でし。でもファーターが……」

そう言ったメルの顔は大きく歪んでいた。今にも泣きだしそうな顔だ。

「どうした。何があつた？」

リヤンが険しい顔で問い詰める。メルは零れそうな涙を堪えて今までの経緯を説明した。

「ファーターはアレクと交戦中でし。剣が一つしかなくて辛いのでし」

「……私が……私のせいでバイロン怪我していたのに」

「行くぞ。小娘」

アンリの後悔を振り払うようにリヤンは立ち上がった。

「メルはどうしていいでしか？」

「お前はここで村人たちがこちらに入って来ぬよう、結界を張っておけ」

「はいでし！」

メルは勢いよく頷いた。

リヤンはそれを見届けると、次にアンリの方を向いた。

「アンリエッタ。ここで転身しろ。もう今更温存もないだろう」

「分かりました」

アンリは大きく頷くと、緑色の瞳を持つフェンリルに転身した。

そしてふさふさの毛で覆われた背にリヤンを乗せると、森の向こうにある古城……バイロンが交戦中の屋敷へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1951g/>

F@K E × F I L E

2011年11月17日19時20分発行